

一、二種深信

（題意）

二種深信の積義をうかがい、他力の信の相状が、捨機託法の二種一具をもって示される旨を明らかにする。

（出拠）

「散善義」

『往生礼讃』

（積名）

「二種」

「深信」

（義相）

二種の開由

機の深信の意義

法の深信の意義

二種一具の相状

二種深信の意義

二種深信の異義

二、三經隱顕

（題意）

宗祖の隠顕積をとおして、三經の説相に差別あるも、意は弘願をあらわすにあることを明らかにする。

（出拠）

「化身土文類」隠顕積

（積名）

「三經」

「隠」

「顕」

「顕彰隱密」

(義相)

『觀經』の隱頭

『小經』の准知隱頭

三經一致と差別

三、難易二道

(題意)

『易行品』『往生論註』に用いられている難易二道の意をうかがい、『易行品』の当面では諸仏、菩薩の易行に通ずるが、龍樹の本意につけば弥陀易行であること、並びに易行の物体を明らかにする。

(出拠)

『易行品』

『往生論註』

(積名)

「難」

「易」

「二道」

(義相)

易行の所期

易行の通局

易行の物体

二道判と曇鸞の積義の交渉

〈特別論題に基づく自由討議〉

「環境問題と仏教」

【目的】

・近年、環境への関心が高まっている。まず環境問題の現状を確認した上で、「自然」という言葉の概念を、仏教的意味に注意しながら明らかにしたい。また念仏者が環境問題をどのように捉え、いかに関わっていけるかを検討する。

【討議にあたって確認しておくべき点】

- 一、環境問題の現状
 - ・従来指摘される河川や大気の汚染に加え、近年、温暖化や資源の枯渇など、地球規模での環境問題が深刻化している。

二、環境問題への取り組み

- ・ゴミの分別等、個人や家庭単位での取り組みから、温室効果ガスの削減目標の設定といった国単位での動きまで、環境保全へ向けて幅広い活動がなされている。また、宗門内においてはNPO「沙漠緑化アミダの森」による植樹事業も行われている。

【論点】

念仏者と環境問題

- ・自然（しぜん）と自然（じねん）
いわゆる自然界を意味する自然（しぜん）と、仏教における自然（じねん）という言葉について考える。また、仏教では自然界をいかに捉えているかを検討する。

・縁起

仏教の縁起思想では、あらゆるものは関係し合って成り立っており、互いに依存することで存在していると示される。何一つとして孤立して存在しているものはないと説く縁起思想に基づいて、人間と自然環境とが共に生き、生かされている関係であるという観点から、環境問題について考える。

・少欲知足

少欲知足とは、ただ物欲を制限し、僅かな物で満足しようとする生き方を意味するの。物質的満足を求めることから、宗教による精神的充足感を求めることへの転換という視点をもちながら、少欲知足という生き方について考える。また凡夫という観点からも検討する。

【討議のすすめ方】

各問題について発言者数名がそれぞれ意見を述べ、それら発言に対して、同じく質問者数名が意見をし、発言者と質問者の間で自由に討議を行う。

【参考文献】

・書籍

- 大谷光真「仏教と自然保護・試論」『宗教的真理と現代』所収 教育新潮社
理科年表シリーズ『環境年表』第1冊 平成二十一・二十二年 国立天文台編
丸善株式会社
『環境問題を考える』浄土真宗教学研究所編 本願寺出版社
『宗教と環境』浄土真宗教学研究所編 本願寺出版社
『仏教生命観の流れ〜縁起と慈悲〜』（人間・科学・宗教ORC研究叢書（2）） 法蔵館
『環境倫理学』鬼頭秀一・福永真弓編 東京大学出版会

・論文

- 徳永道雄「仏教における自然（しぜん）と自然（じねん）」『日本仏教学会年報』第六八号所収